

2018年1月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 真の人間への道

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫／人間の感官（六処）に関する経典群／六処相応／27 ヴェーサーリ（毘舍離）

#### (2) 主題

この世で生活し人生を送っている人の中には、涅槃に入れる人と入れない人がいます。それは何故なのか、学んでみたいと思います。

### 2. ウツガ長者

#### (1) 経文「ヴェーサーリ（毘舍離）」

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、ヴェーサーリ（毘舍離）のマハーヴァナ（大林）なる重閣講堂にましました。

その時、ウツガ（郁瞿婁）というヴェーサーリの長者があり、世尊のいますところに到り、世尊を礼拝して、その傍らに坐した」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.80）

#### (2) ウツガ長者

「ウツガ（郁瞿婁）というヴェーサーリの長者」とあります。

ウツガ長者は、在家でありながら、高い聖者の境地に達していたようです。阿羅漢（応供）の境地には至らなかったものの、その手前の阿那含（不還）の域には達していたと言われています。

「ウツガ経」というお経があるそうですから、かなり活躍した優婆塞（在家の仏弟子）であったようです。

### 3. 涅槃

#### (1) 経文「ヴェーサーリ（毘舍離）」

「傍らに坐したヴェーサーリの長者ウツガは、世尊に申しあげた。

『大徳よ、いったい、この世のある者が、現生において涅槃に入ることのできないのは、なにがその原因であり、なにがその条件でありましょうか。』

しかるに、大徳よ、この世のある者は、現生において涅槃に入ることができると申しますが、それは、なにがその原因であり、なにがその条件なのでありましょうか。』（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.80）

## (2) ウツガ長者の質問

ウツガ長者は、釈迦牟尼世尊に次のような質問をしました。

質問1：この世に存在している人が、現生において涅槃に入ることのできない原因と条件は何か

質問2：この世に存在している人が、現生において涅槃に入ることができる原因と条件は何か

## (3) 涅槃

「涅槃」とは、「迷いの火を吹き消した状態」です。

「迷う」とは、「見分けがつかなくなること」「取り違えること」です。

ですから「涅槃」は、「見分けがつくこと」「取り違えることがないこと」です。

涅槃に入っている人は、正しい道と誤った道の見分けがつき、取り違えることはありません。

涅槃に入っていない人は、正しい道と誤った道の見分けがつかず、しばしば取り違えます。

## (4) 現生

「現生において涅槃に入る」とは「生きている間に涅槃に入る」ということです。

いま生きているこの人生を大切に思うなら、この人生のうちに涅槃に入り、真の人間として生きていきたいものだと思います。

## 4. 涅槃に入れぬ

### (1) 経文

「長者よ、眼は色(物体)を見る。その色は、心地よく、愛すべく、心を浮きたたせ、その形もうるわしくして、魅惑的である。もし比丘がそれを喜び、それを讃え、それに恋著していると、彼の意識はそこに膠著し、そこに執著する。長者よ、執著ある比丘は、涅槃に入ることにはできない。

長者よ、また、耳は声を聞く。……鼻は香りを嗅ぐ。……舌は味をあじわう。……身は感触を感ずる。……そして、意は法(観念)を識る。……長者よ、執著ある比丘は、涅槃に入ることにはできない。

長者よ、この世のある者が、現生において涅槃に入ることのできないのには、このような原因があり、このような条件があるのである」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.80~81)

### (2) 涅槃に入れぬ原因と条件

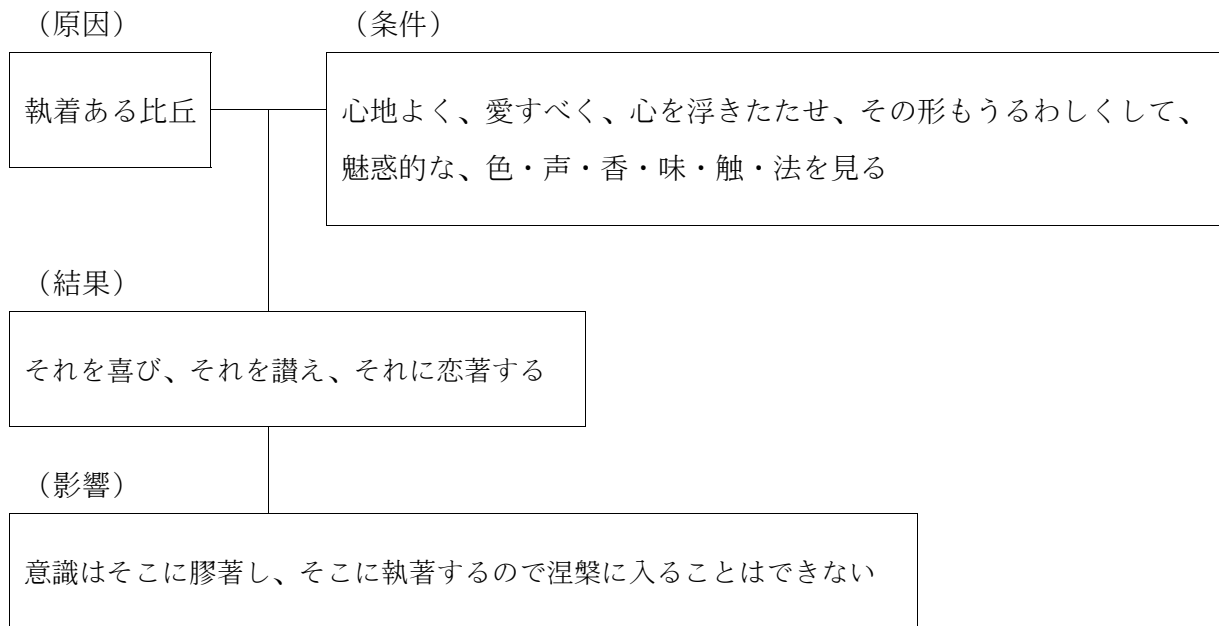
涅槃に入れぬ比丘の原因・条件・結果・影響の関係をみてみます。

原因：執着ある比丘。

条件：心地よく、愛すべく、心を浮きたたせ、その形もうるわしくして、魅惑的な、色・声・香・味・触・法を見る

結果：それを喜び、それを讃え、それに恋著する。

影響：意識は、そこに膠著し、そこに執著するので、涅槃に入ることにはできない。



## 5. 涅槃に入る

### (1) 経文

「しかるに、長者よ、眼をもって色を見る。その色は、心地よく、愛すべく、心を浮きたたせ、その形もうるわしくして、たいへん魅惑的であるが、もし比丘が、それを喜ばず、それを讃えず、それに心を奪われないならば、彼の意識はそこに膠著せず、そこに執著することがない。

長者よ、執著することなき比丘は、涅槃に入ることができるのである。

長者よ、また、耳は声を聞く。……鼻は香りをかぐ。……舌は味をあじわう。……身は感触を感ずる。……そして、意は法を識る。……長者よ、執著することなき比丘は、涅槃に入ることをうるのである。

長者よ、この世のある者が、現生において涅槃に入ることができるのには、このような原因があり、このような条件があるのである」 (増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.81)

### (2) 涅槃に入る

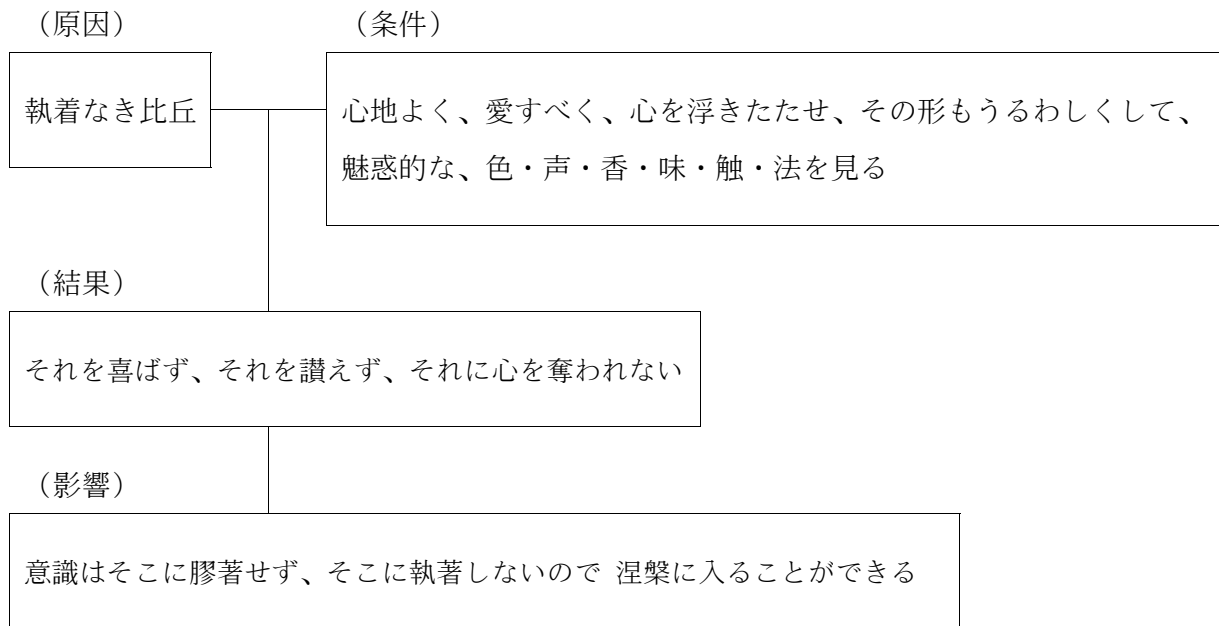
涅槃に入れる人の原因・条件・結果・影響の関係を見てみます。

原因：執着なき比丘。

条件：心地よく、愛すべく、心を浮きたたせ、その形もうるわしくして、魅惑的な、色・声・香・味・触・法を見る

結果：それを喜ばず、それを讃えず、それに心を奪われない。

影響：意識は、そこに膠著せず、そこに執著しないので、涅槃に入ることができる。



## 6. 涅槃に入れない修行者・涅槃に入れる修行者

### (1) 条件は同じ

執着ある比丘も、執着なき比丘も「心地よく、愛すべく、心を浮きたたせ、その形もうるわしくして、魅惑的な、色・声・香・味・触・法を見る」ことは、共通しています。条件は同じなのです。

### (2) 結果・影響が違う

#### ① 涅槃に入れない

執着ある比丘は、それを喜び、それを讃え、それに恋著することによって、意識はそこに膠著しそこに執著するので涅槃に入ることはできません。

#### ② 涅槃に入れる

執着なき比丘は、それを喜ばず、それを讃えず、それに心を奪われないことによって、意識はそこに膠著せず、そこに執著しないので涅槃に入ることができます。

### (3) 原因が違う

#### ① 執着がある

経文に「執着ある比丘は、涅槃に入ることはできない」とあります。

「執着がある」という原因を持つ比丘は、涅槃に入れないのです。

#### ② 執着がない

経文に「執着することなき比丘は、涅槃に入ることができる」とあります。

「執着がない」という原因を持つ比丘は、涅槃に入れるのです。

(4) 涅槃に入れない修行者と涅槃に入れる修行者の違い

|    |   |                                  |
|----|---|----------------------------------|
| 原因 | 執着がある   | 執着がない                            |
| 条件 | 心地よく、愛すべく、心を浮きたたせ、その形もうるわしくして、魅惑的な、色・声・香・味・触・法を見る |                                  |
| 結果 | それを喜び、それを讃え、それに恋著する                               | それを喜ばず、それを讃えず、それに心を奪われない。        |
| 影響 | 意識はそこに膠著し、そこに執著するので涅槃に入ることはできない                   | 意識はそこに膠著せず、そこに執著しないので涅槃に入ることができる |

7. 執着の作用

(1) 執着の生活・人生

人が執着を持つと、執着を中心にした生活・人生を営みます。

- ・財産に執着すると、財産を求めることを中心にして、生活・人生を営みます。
- ・地位や権力に執着すると、地位や権力を中心にした生活・人生を営みます。
- ・お酒や遊びに執着すると、お酒や遊びを中心にした生活・人生を営みます。
- ・人間関係に執着すると、自分に都合のいい人間関係を求めて、生活・人生を営みます。
- ・評判に執着すると、自分に都合のいい評判を求めて、生活・人生を営みます。

このため真の自分を見失い、真の自分を中心にした生活・人生を営むことが出来なくなります。

(2) 六道輪廻

仏教に、六道輪廻という考え方があります。執着ある人は六道から抜け出すことができません。

六道は真の人間の道ではありません。

- ・地獄道：執着が満たされないことを怒り、ものごとを見境なく破壊する瞋恚の状態です。
- ・餓鬼道：執着にまみれ貪欲を中心に生きる状態です。
- ・畜生道：正しい筋道を見失い、執着を満たすためにわがままに生きる愚痴の状態です。
- ・修羅道：人々の間で執着を振り回し、意見や利害が衝突し、争いが絶えない瞋恚の状態です。
- ・天道：貪欲・瞋恚・愚痴の中で、なんらかの執着が満たされた喜びの状態です。
- ・人間道：貪欲・瞋恚・愚痴で生きながらも、辛うじて人間関係を意識しています。

人間関係を意識していることにより、真の人間の道へ入ることができる可能性があります。

## 8. 真の人間の道

真の人間として生きる道について、庭野日敬師の言葉から学んでみたいと思います。

### (1) 苦しみを招く

「仏さまの本体は、この世のありとあらゆるものを生かしておられる久遠実成の本仏です。ですから、その本仏のみ心のとおりにいきておれば、心は自由自在であり、いつもしあわせにしておられるのに、ついそれを忘れてしまうために、わがままな行ないをして、そのためにみずから苦しみを招いているわけです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.168）

ここにある「わがままな行ない」が、執着の行為です。執着の行為によって、みずから苦しみを招くのです。

### (2) ほんとうの人間らしい生きかた

「もしわれわれが、いつも『自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ』という自覚を深くもち、『久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のとおりに生きることが正しい生きかただ』という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などあってもなきにひとしくなってしまうのです」（同、p.169）

この生きかたが、ほんとうの人間らしい生き方であると、庭野日敬師は述べています。

### (3) 本来の自分を生きる

執着を中心にした生活・人生をやめて、久遠実成の本仏、言い換えれば宇宙の大生命に生かされて生きるほんとうの人間らしい生きかたに切り替えれば、そのときから本来の自分を生きることができるのです。